

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730669

研究課題名(和文) 軽中度難聴者のストレス対処プログラムの開発と効果の検討

研究課題名(英文) Development of program for mild and moderate hearing-impaired people to treat stress events

研究代表者

勝谷 紀子 (Katsuya, Noriko)

青山学院大学・社会情報学部・助教

研究者番号：90598658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：軽度・中等度の難聴者、中途難聴者を対象に、ストレスに対処するためのプログラムをつくるための研究を行った。まず、複数の難聴者への意見聴取を行い、聞こえにまつわるストレス経験、ストレス経験への対処方法、難聴・難聴者について誤解されやすいことや理解されないと感じることを調べた。難聴者への意見聴取の内容をもとに、聞こえにまつわるストレス対処を考えるためのワークショップを行った。くわえて、難聴についての知識を健聴者に伝えることの効果も調べた。また、難聴に関するストレス経験を調べる尺度を作った。尺度を使って難聴者を対象に調査を行ない、聞こえの状態と心身の健康との関係を検討した。

研究成果の概要(英文)：We conducted research to create a program that helps persons with mild to moderate hardness of hearing and those with post-lingual hearing loss cope with stress. First, we held hearings where a number of persons who are hard of hearing voiced their opinions. We examined their experiences of stress related to hearing, their ways of coping with the stress, what are easily misunderstood with regards to hardness of hearing and persons with hardness of hearing, and their feelings of not being understood. Based on the content of the hearings, we conducted workshops to consider ways to cope with stress associated with hearing. In addition, we investigated the effects of presenting knowledge about hardness of hearing to hearing persons. We also developed a scale to measure the stress experience related to hardness of hearing. Using this scale, we conducted a survey of persons who are hard of hearing, and studied the relationship between their state of hearing and mental and physical health.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：難聴 聴覚障害 軽中度難聴者 ストレス ストレス対処 精神的健康

1. 研究開始当初の背景

(1) 軽度から中等度の難聴者（以下、軽中度難聴者）は、聴覚に障害があるとは外からはわかりにくいことが多い。そのため、日常生活におけるさまざまな困難が他者から理解されにくかったり、誤解されたりするという問題がある（山口, 2003）。

(2) 聴覚障害者というと、一般的には「耳が聞こえない」「会話がわからない」「手話」などのイメージが強い（勝谷, 2011）。ところが、静かな場所ならば聞き取りに問題がない聴覚障害者、スムーズに発話ができる聴覚障害者、手話を用いずに口頭でやりとりができたりの聴覚障害者も実際には数多くいる。

(3) また、軽中度難聴者は、聴覚障害の程度がろう者や重度の聴覚障害者にくらべて重くないことから、身体障害者手帳を取得できない、高額な補聴器を自費で購入せざるを得ない、など社会保障的な保護も薄いという状況におかれている。このように、軽中度難聴者は、様々な面で非常にストレスフルな環境におかれているというのが現状である。

(4) これまでにおこなわれた聴覚障害者に関する心理的適応の研究は、ろう者や重度の聴覚障害者、重複障害者を対象とした研究が比較的多い（たとえば、村瀬, 1999, 2005; 村瀬・河崎, 2008）。一方で、潜在的には数百万を超えるともいわれている軽中度難聴者を対象とした心理学的研究は遅れているのが現状である。

(5) そこで、本研究では、軽中度難聴者が日常生活の中で経験するストレス要因を調べ、聞こえにまつわるストレスを自分なりに対処するためのプログラムを作成する。また、難聴や難聴者についての理解が進んでいない現状から、健聴者（健康な聴力を持つ者）を対象としたプログラムの作成も試みる。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、軽中度難聴者が日常生活でどのようなストレスを経験しているのかを明らかにし、それらに対して自分なりに対処するための難聴者向けプログラムをつくる。また、難聴者とかかわる健聴者向けのプログラムもつくり、健聴者が難聴について理解を深められるような取り組みをおこなう。

(2) 軽中度難聴者がプログラムに参加したことによる効果を検討するとともに、健聴者がプログラムに参加することによって聴覚障害者への理解を深めるか、聴覚障害者へのイメージや態度・偏見が変化するかも調べることとする。

3. 研究の方法

(1) 平成 23 年度では、軽中度難聴者が日常生活でどのようなストレスを経験しているのかを調べるための調査を行った。インターネット上のウェブサイト、交流サイト、中途失聴者・難聴者協会などを通じて、調査への協力を依頼した。協力の同意を得た者に対して、郵送、ファクス、メールのいずれかの方法を用いて調査を行った。

調査では、現在の聞こえの状態、ストレスを感じる経験を日常生活でしたことがあるか、経験している場合にはどのようなストレスをどのような場面で経験しているのか、ストレスを感じる経験に対して自分ではどのような対処をしているのかについて尋ねた。

(2) 平成 24 年度では、前年度の研究成果をもとにして、難聴者への意見聴取をさらに幅広くおこなった。具体的には、現在の聞こえの状態や聞こえ方の特徴、聞こえにまつわる問題でどのようなことにストレスを感じるか、それらのストレスに対してどのように対処しているか、聞こえについての問題で周囲の人びとから理解されていないあるいは誤解されていると感じることは何か、周囲の人達に理解してほしいことや伝えたいと思うことについて尋ねた。

難聴者への意見聴取にあたっては、一対一のインタビュー形式で行なった。聴覚障害があってもスムーズに意見聴取がおこなえるよう、口頭だけではなく、筆談、メール、チャット、書面の郵送などの方法もあわせて用いた。

さらに、聴覚障害の研究者、当事者である難聴者、難聴者と関わったことのある者からもコンテンツについて意見聴取をおこなった。これらの回答を整理、分類をして内容をまとめた。

(3) 最終年度である平成 25 年度では、軽中度難聴者が日常生活で経験するストレス経験に自分なりに対処するためのコンテンツ、健聴者が難聴・難聴者を理解するためのコンテンツを作成した。

まず、これらを用いて、学生を対象に聴覚障害に関する知識を伝えることの効果調べた。講義形式で聴覚障害に関する知識や難聴者のストレスについて伝え、その後に聴覚障害者へのイメージ、聴覚障害者と関わることへの自己効力感、講義を聞いての感想を尋ねた。また、難聴者と接する架空の事例を示して、自分だったらどのように接すると思うかの回答を求めた。

次に、プログラムの効果を調べるのに先立ち、難聴にまつわるストレス経験を調べるための質問項目を作成した（難聴にまつわるストレスイベント尺度）。これらの質問項目と、聞こえの状況、身体的健康および精神的健康を調べる質問項目などを用いた調査票を作

成し、難聴者を対象に調査をおこなった。これにより、現在の日本における難聴者のストレス経験や身体的健康および精神的健康の実態についても調べた。

続いて、作成したコンテンツを用いて、難聴者を対象にしたストレス対処のためのワークショップを実施した。ワークショップでは、スライドや冊子、ワークシートを用いて、自分の聞こえの状態、聞こえについてストレスに感じていることやそれへの対処方法、聞こえについて理解されていない・誤解されていると感じることについてふりかえるワークを行った。

その後、難聴の参加者同士でのグループワークを行うことによって、参加者同士の体験や考えを共有して発表しあった。

4. 研究成果

(1) 平成 23 年度では、難聴者を対象にストレス体験についての調査を行った。その結果、ストレスに感じることの内容については、日常生活でのさまざまな場面にわたっていた。

たとえば、コミュニケーションのずれや行き違い、情報保障のたりなさ、電話や窓口や病院などの日常生活での不便、交通などでの危険な経験などに関する記述が主に見られていた。

(2) 平成 24 年度では、聞こえの状況、聞こえにまつわるストレスやストレス対処についての意見聴取を難聴者に対して幅広く行った。難聴や難聴者について誤解されていると思うことや理解されていないと感じることについても意見聴取をおこなった。

その結果、聞こえの状況については、聞こえ方の特徴、耳鳴りの特徴、体調による変化についての体験についてのさまざまな語りが得られた。

聞こえにまつわるストレスやストレス対処については、たとえば、コミュニケーションのズレや不確かさ、対人関係の構築の難しさ、職場や就職活動の問題、必要な情報の入手の難しさ、日常生活の不便などさまざまな場面についてのストレス経験の語りが得られた。

これら聞こえにまつわるストレスへの対処については、自分自身の行動を変えることによる方略（行動的方略）、コミュニケーションの工夫をすること、気にしないなど自分の考え方をすることによる方略（認知的な方略）、聞こえやすい位置に座るなど自分が聞き取りやすいように環境を整えることなどがあげられた。

難聴や難聴者についてよくある誤解、理解されないことについては、聞こえの特徴（ただ音が小さく聞こえるだけではない、片方の耳だけが聞こえない場合もある、など）、コミュニケーションへの配慮（大きな声で話せばわかるわけではない、など）、難聴者の行

動（コミュニケーション能力や知的な能力など聴覚以外に問題があると誤解されやすいことなど）、補聴器（補聴器は万能ではない、補聴器をつけているからといって全て聞こえるわけではない、など）などがあげられた。

(3) 最終年度である平成 25 年度では、聴覚障害ではない健聴の学生を対象に、講義形式で聴覚障害についての知識を伝えることの効果を調べた。

講義後の感想では、聴覚障害の特徴や聴覚障害者が困ることについて初めて知ったこと、補聴器について知らないことや意外に思ったことがあったなどの記述がみられた。

また、聴覚障害者への態度やイメージ、聴覚障害者とかかわることへの自己効力感がどれだけ変化するか、感想の内容についてのテキスト分析をおこない、今後学会発表や学術論文にて報告する予定である。

次に、難聴者を対象に調査をおこない、難聴にまつわるストレス経験、聞こえの状況、身体的健康および精神的健康の実態について調べた。

精神的指標のひとつである抑うつについては、身体障害者手帳を持っている難聴者と持っていない難聴者との間で有意な差がみられていなかった。また、聴覚障害の程度が重いほど精神的に不健康であるという傾向も見出されなかった。調査の詳細な結果については、今後学会発表や学術論文にて報告する予定である。

難聴者を対象にしておこなったストレス対処のためのワークショップでは、参加者にワークショップを開始する前と終了後に調査票への回答を依頼した。

ワークショップの内容についての感想では、「聞こえについて客観的に考える機会になった」「自分のことを考える良い機会になった」「インタビューの載った冊子が参考になった」などの回答が出された。

また、ワークショップの内容への意見、要望、改善すべき点については、「似た環境の人と同じグループにしたほうがよい」「グループワークは短時間では難しい」などの意見が出された。

こうした声から、難聴者が参加するグループワークがより効率的かつ有意義に進められるような改善点も明らかとなった。具体的には、ワークショップを進めている時の情報保障の質と量をより充実させて、グループワークに自分が十分に参加していると参加者が感じられるようにすることがまずあげられる。

その他、グループワークを始める前にグループワークの意義や目標点を事前により明確に示して何をすべきかわかりやすく伝えること、グループ内のやり取りの仕方や手順をよりわかりやすく視覚化して伝えること、などが考えられる。ワークショップの実践については、特殊教育学会第 52 回大会に

において報告予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 6 件)

勝谷紀子 (2014) 難聴者を対象にした
ストレス対処ワークショップ 特殊教育
学会第 52 回大会発表予定
(2014/9/20-22) (高知大学朝倉キャン
パス)

難聴者のメンタルヘルスについて考
える 日本心理学会第 77 回大会 公募シ
ンポジウム(企画者・話題提供者を担当)
(2013/9/19) (札幌コンベンションセン
ター)

Katsuya, N. (2013) Characteristics of
stress life events on hard-of-hearing
people (The 4th Asian Cognitive
Behavior Therapy (CBT) Conference)
(2013/08/23)(Teikyo Heisei
University)

難聴者の心理学的問題を考える 2 - コ
ミュニケーションの配慮について考
える - 日本心理学会第 76 回大会 自主
ワークショップ(企画者・話題提供者を
担当) (2012/9/11) (専修大学生田キャン
パス)

難聴者の心理学的問題を考える 日本
心理学会第 75 回大会 自主ワークショ
ップ(企画者・司会者・話題提供者を担
当) (2011/9/16) (日本大学文理学部)

勝谷紀子 (2011) 「難聴」のしろうと理
論(2) - 「難聴の人々」についての検
討 - 日本心理学会第 75 回大会発表
(2011/9/15)(日本大学文理学部)

〔その他〕

神奈川県聴覚障害者福祉センター主催
の平成 26 年度要約筆記者養成講習会に
おいて、講義を 1 回担当した(講義内容
「対人援助 (中途失聴・難聴者の臨床
心理、体験談など)」) (2014/6/11)

平成 25 年度相模原市要約筆記者研修会
において、講義を 1 回担当した(講演内
容「聴覚障害者の心理について」)
(2013/12/14)

横浜市中途失聴・難聴者協会主催の平成
25 年度横浜市要約筆記者養成講習会に
おいて、講義を 1 回担当した(講演内容
「中途失聴・難聴者の臨床心理」「カウ
ンセリングの基礎理論」) (2013/9/5)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝谷紀子 (KATSUYA NORIKO)
青山学院大学・社会情報学部・助教
研究者番号：90598658

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし